

中島眞澄監修『写真アルバム 佐世保市の120年』

真田, 高充
長崎県立大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/7172168>

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 39, pp.149-152, 2024-03-25. 九州大学附属図書館
付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン :
権利関係 :



【書評】 中島眞澄監修『写真アルバム 佐世保市の120年』

真 田 高 充

「日本遺産」をご存知だろうか？「世界遺産」は良く耳にするけれども、日本遺産に指定されている地名や内容については詳しくない方も多
いはず。

そこで知っているようで知らない、そんな日本遺産の旧軍港四市の一つに指定されている佐世保について、『写真アルバム 佐世保市の120年史』⁽²⁾（中島眞澄監修、小関彰博・川内野篤・祖谷敏行・原口聡・久村貞男・前川雅夫・宮崎勝秀・山口日都志の各氏が執筆、以下「本書」）をもとに、同市の幕開けとなる明治初期から基地の街として歩み始めた終戦までの記録をわが国の近代史とともに折々に触れながら紹介したい（本書は、写真アルバムの性質上、解説・紹介を重視している）。

佐世保の幕開けは、今から一三七年前に遡る明治十九（一八八六）年、佐世保村への海軍鎮守府⁽³⁾の設置から始まった。それまでの佐世保は平戸藩所領の一部であり、明治に入っても面積は現在の二四分の一度（当時約一七・八㎢↓現在約四二六㎢）、人口もわずか三千七百人余りの小さな漁村の一つに過ぎなかった（現在約二三十万人）。

佐世保が海軍鎮守府の公布を受けた背景には、その恵まれた地形にある。もちろん、日清、日露戦争の舞台である隣国中国への地理的な優位性はあるものの、佐世保が天然の良港であったことがその大きな要因である。

この海軍鎮守府の公布から一六年後の明治三五（一九〇二）年、佐世保は「村」から「市」へと一足飛びに移行した。この間の人口は四万八千人を超え（三、七〇〇人↓四八、〇〇〇人）、一挙に一三倍に膨れ上がっている。当時の鎮守府建設は軍事拠点としてだけでなく、大規模な都市開発を意味する証左であろう。

鎮守府開庁のエピソードの一つに、「明治天皇を迎え盛大な開庁式が挙行され、人々は、近隣から夢をもとめて多くの人が流入した」との記録が残っている。多い年で年間一万二千人の流入を数えた年もあったようだ。急速な近代化を目指す政策は、今でいうところの「開発独裁」⁽⁵⁾や「リープフロッグ」⁽⁶⁾に近い現象だったのだろう。

ちょうど同じ頃、官営製鉄所として国会議事堂や東京駅の資材となる

鉄鋼を生産した八幡（北九州）でも、人口一、〇〇〇人だった「村」が二〇年間で一〇万人規模（一〇〇倍）となり、「市」として猛スピードの発展を遂げたように、佐世保もまた「近代化の要」が突如出現した同様のエピソードとして語り継がれている。

この当時の写真を見ると、どこまでも瓦屋根の家々がひしめくように並び立ち、ある意味混沌としたまち並みが写っている。この混沌としたまち並みこそが、急速に都市開発を進めた痕跡として、現在の佐世保をかたちづくる原風景といえよう。城下町をルートとした城跡や石垣、武家屋敷跡がある整然とした風景とは一線を画している。

また当時の写真には、海軍施設や行政施設、それ以外にも、軍事基地を象徴するさまざまな建物や活動風景が残されている。

中でも、基地の主砲であった「二四センチ榴弾砲」の備砲作業の写真には、緊張した兵士たちの訓練の様子が今でも伝わってくる。二四センチ榴弾砲と言えば、日露戦争（二〇三高地）で活躍した「二八センチ榴弾砲」よりも直径が四センチ程小さいものの、その存在感や重量感には目を見張る迫力がある。日清、日露の両戦争の前線基地であり軍事拠点となっていた佐世保鎮守府の重要性が良くわかる一枚である。

大正時代に入ると、多くの庶民の暮らしぶりにも余裕が見られるようになる。今では見ることでできない「嫁入り行列」や「葬列」の様子だ。嫁入り道具としての長持ちは今でもこぞ珍しいが、それが長い行列となつて当時の華やかさを際立たせている。豪華な行列をひと目見ようと鈴なりになっている見物人の姿は、昔から変わらない庶民の「あこがれ」や「好奇心」が微笑ましい記録として見事に収められている。

この頃は、地域住民による土俵開きや力士による地方巡業など、笑顔

の写真も多く残されている。娯楽の少ない時代にあつて、相撲は今でいうところの地域おこしや地域イベントの一つだったのであろう。戦争のない束の間の平和を象徴する写真が多い。

大正時代も後半になると、戦争の気配が色濃くなっていく。通称「針尾送信所」（佐世保無線電信所）の写真がそうである。三本の壮大な無線塔（タワー）の写真は、建設当時から竣工までの過程が収められている。この無線塔は、大正七（一九一八）年から約四年間、総工費一五五万円（現在価格で二五〇億円相当）、高さ一三〇mを超え、日本海軍がアジアに進出している部隊や戦艦などに向けて無線通信するために造られた構造物である。当時の技術の粋を集めた鉄筋コンクリートのタワーは、八〇年以上たった今日でも当時の姿をとどめており、この地を訪れるものに圧倒的な威圧感を与えている。今では国の重要文化財として、佐世保のシンボルにもなっている。真珠湾攻撃を命じる「ニイタカヤマノボレ一二〇八（一二月八日二攻撃開始セヨ）」の中継や「トラ・トラ・トラ（ワレ奇襲に成功セリ）」の暗号電文を受信したタワーとしても良く知られている。

これ以降、昭和の写真は戦争一色に染まっていく。時代を追うごとに学童による軍事訓練や軍服姿の写真ばかりが目立ってくる。婦人会による出兵祝いや防災訓練、出兵祝いの宴席風景、そして閲兵式の写真がそうだ。男性は軍服や国民服、女性は割烹着姿で統一されている。皆、口を閉じ、顔の表情に乏しい写真が当時の厳しい情勢を物語っている。

さらにページをめくると、空襲で焼け野原になった佐世保の写真が目飛び込んでくる。市街地で唯一、外壁だけが焼け残った「佐世保玉屋」の姿は、空襲の悲惨さを痛烈に伝えている。

本書の記録によると、甚大な被害をもたらした背景には、想定とは違う爆撃機B-29の侵入経路にあったようだ。当時、警戒していたB-29の侵入ルートは、東シナ海方面でかつ高度六、〇〇〇m以上の攻撃だった。しかし、佐世保大空襲^⑨はこの想定とは違っていた。太平洋側から夜間に、しかも三、〇〇〇m未満の低高度で侵入したせいで、まるで奇襲を受けたような空爆によって壊滅的な被害を受けてしまったのだ。

何もかもを失い、復興する暇もなく終戦を迎えた佐世保のまちは、同時に住民の支えであった海軍をも失ってしまった。終戦の翌月にはすでに進駐軍が上陸しており、緊張した面持ちで不安そうに進駐軍の行進を見守る住民の姿が収められている。

しばらくは住民と進駐軍との親交がなかなか進まなかったようだが、その雰囲気を一変させたのは子どもたちの好奇心であったと記されている。興味津々の子どもたちがアメリカ兵に近寄って行くことで、これまでの「敵対心」一色から、徐々にではあるが「恐る恐る」、そして「親近感」へと当時の空気を変えていったようだ。当時の写真から、受け入れ難い心情と、変わっていく社会に折り合いをつけようとする住民たちのたくましい苦悩が伺える。

こうして、まちの復興は、進駐軍を相手とするキャバレーやバー、そしてダンスホールなどの接客業が後押しとなって、徐々にではあるが焼け跡から新しいまち並みへと整理されていった。

最後は、進駐軍に代わって米軍が駐屯する基地のまちとしての佐世保の記録である。

海軍の城下町として発展してきた佐世保にとって、海軍に依存することない新たな都市建設に向けたまちづくりは、幸いにも周辺の炭鉱地域

が市町村合併することによって実現していった。主要産業としての炭鉱業の勃興に加え、戦前から施設の一部を承継した造船業、更には西日本で最初の外国貿易港へと指定されることで、労働集約型産業が集積し、多数の雇用を生み出したことで人々が集まり、都市としての機能が整えられていった。背景には戦前の軍用資産を生みまたは公益用資産として無償で譲渡するという「旧軍港市転換法」^⑩を活用したまちづくりが、軍港都市佐世保を「平和産業港湾都市」へと生まれ変わらせたのだ。

その後も「朝鮮戦争」「ベトナム戦争」そして「東西冷戦」における佐世保の地政学上の位置付けは、役割りこそ違えど、今でも重要な拠点として存在し続けている。

昨年（二〇二三年）は、第一次大戦に佐世保鎮守府所属艦艇の活躍を記念して建設された「旧海軍佐世保鎮守府凱旋記念館」が、ちょうど建設一〇〇周年を迎えた。「旧海軍佐世保鎮守府凱旋記念館」は、「佐世保市民文化ホール」と呼び名を変え、国の有形文化財の指定を受けながら、今なお演劇や音楽活動を行う施設として市民から親しまれている。

佐世保のまちは、赤煉瓦倉庫など百年を超えた施設や天然の良港も当時のままの姿を残している。是非とも佐世保を訪れて、近代化の躍動を体感していただきたい。

（樹林舎、二〇二三年、九、九九〇円「税込」）

注

（１）旧軍港四市とは、佐世保市、横須賀市、呉市、舞鶴市の四市のこと。

（２）本書は、市制一二〇周年の記念出版された明治から平成までを記録した

歴史写真アルバムである。見どころは何と言っても、明治になって近代国家の建設へと舵を切った当時の写真の数々である。

(3) 海軍鎮守府とは、旧大日本帝国海軍の根拠地のこと。

(4) 天然の良港とは、水深が深く（戦艦は喫水が深い）、岬と入江とが複雑に入り込み、周囲を陸地に囲まれた内海や湾のこと。

(5) 開発独裁とは、貧しい国が一举に経済を発展させるときに独裁政権下で、国のお金を効率的に開発に投下することによって経済を成長させる方法。

(6) 現在、アフリカやアジアで開発されているように、通常は数十年かかる整備がわずか数年で起こることから、「カエル跳び」になぞらえた呼び名のこと。

(7) 二四センチ榴弾砲とは、大砲の一種。射程距離は二八センチ榴弾砲よりやや長い（約一〇、〇〇〇m）。本書によると、二四センチ榴弾砲の組み立てには一六時間以上かかるため、分解し組み立てる訓練が繰り返し行われていた。

(8) 長持ちとは、衣類、夜具、調度などを収納する蓋（ふた）付きの長方形の箱で、二人で担いで運んでいた。近年まで嫁入り道具の一つだった。

(9) 佐世保大空襲は昭和二〇（一九四五）年六月二九日午前〇時三〇分の重爆撃機B-29による空襲。焼失家屋一二、〇三七戸、犠牲者一、二一七人と言われている。

(10) 旧軍港市転換法とは、佐世保市、横須賀市、呉市、舞鶴市の四市のみに適応される法律で、一九五〇年に公布・施行された。